

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22402048

研究課題名(和文) シミュレーションを通じた共生観の構築に関する社会心理学的実証研究

研究課題名(英文) Research of Multi-ethnic Coexistence Using Social Simulation as Post-colonial Dialogue

研究代表者

松本 陽子(佐々木陽子)(Matsumoto (Sasaki), Yoko)

南山大学・総合政策学部・講師

研究者番号：40274732

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円、(間接経費) 4,050,000円

研究成果の概要(和文)：環境問題理解を目的に開発された社会シミュレーションを元に、パレスチナ地域の地政学的実態を反映した社会シミュレーションを開発した。同時に「ポストコロニアルにおける和解と共生」をテーマにインタビュー、絵画分析、自由連想法分析による調査を行い、ヨハン・ガルトゥングの提唱する「積極的平和；すなわち構造的暴力がない平和」を志向することが「ポストコロニアルの共生」を考える上で最も重要な要素の一つであると確認した。社会シミュレーションのワークショップの結果、「積極的平和」を志向する対話の一部として活用すれば、シミュレーションの疑似体験であっても集団間接触のダイナミクスを理解するツールとして有効と認められた。

研究成果の概要(英文)： This research has developed a social simulation focused on the geopolitical factors of conflict in Palestine. I have examined a concept of cultural symbiosis and multi-ethnic coexistence by analysis of previous works and interviews, and have found "positive peace; absence of structural violence" (Johan Galtung) is one of the most essential factors to pursue a post-colonial coexistence.

The developed social simulation was conducted in Japan, Israel, and Palestine to see reduction processes of intergroup conflict in terms of multi-ethnic coexistence. Semi-structured interview, PAC Analysis, and interpretation of the kinetic school/social drawings (KSD) were also conducted. Simulation/gaming was effective to establish a framework for regional dialogue to create a positive dynamics of conflict. This result suggests a further possibility of simulation and gaming as an approach of action-research in local community.

研究分野：社会科学D

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：シミュレーション ゲーミング 共生 構造的暴力 対話 ポストコロニアル ワークショップ 共同体

1. 研究開始当初の背景

集団間葛藤とくに偏見問題は社会アイデンティティ理論に基づく接触理論が有力視されており、接触に伴うアイデンティティ再編を経て共生へ移行すると想定されていた。ただし共生概念の精緻化とくに構造的暴力概念を導入した上での平和概念の二層(当面戦火がないというだけの消極的平和と、戦火のみならず人権平等などの質的平和の基礎となる諸条件を満たす積極的平和)も踏まえた質的共生の実現をも射程とする共生観に関しては、まだ精緻に検討されていないという課題があった。また接触仮説が有効だとしても、実際の紛争が生じた後に、紛争に起因する様々なバイアスを抜きにした接触は成立が困難であるため、代替手法としての仮想接触の有効性を検討する必要があった。

シミュレーション・ゲーミングという手法は、テキスト学習と比して、静的な知識よりダイナミクスの学習に向いているという点から、各種の職業教育や企業内研修、軍事やスポーツなど集団の動きの学習に用いられてきた。実験的試行錯誤が不可能であった従来の社会科学的研究に、時系列を過去へさかのぼってやり直したり、議論しなおしたりする可能性を与えたのもこの技法で、経営や資金の流れを学ぶための教育や、環境問題や複雑系政治学の学習など複合領域の社会的課題に対応する上で有効なツールである。これまでにシミュレーション・ゲーミングはグローバルイシューに対して様々な活用されてきたものの、紛争地の対話ツールとして応用された例は希少で、そうした使用の可能性と限界を調べることも重要であった。

2. 研究の目的

集団間葛藤の解決における集団間接触の役割は非常に重要であるとされてきたが、紛争状態にある集団間にとっては攻撃的ではない状況で出会うことや、そもそも対話のような深い交流を行うことに様々な複合的困難が伴う。「社会とは部分の総和以上のものであり、その全体的構造に注目しなければならない」(デュルケム)と言われるように、集団間葛藤の解決および共生の追究過程においても個別のマクロな事象の集積に加え、状況の俯瞰的把握や、ダイナミズムが重視される。本研究では紛争状態にある地域問題に対して、対話や相互作用を通じたダイナミクスを把握する目的でシミュレーション・ゲーミングを使用したワークショップを実施し、そこでの体験の中で紛争を悪化させる要素や緩和する要素について参加者が体験、議論することによって共生観に対する新たな知見や態度を得る過程を調査することを目的とした。とくに、シミュレーション過程においてはゲームの中に埋め込まれた建設的および破壊的コミ

ュニケーション手段を採用することで集団間関係のダイナミクスを理解し、ディブリーフィング作業過程においては葛藤状態にある集団を含めた地域全体の理解を深め、それらの作業を通して共生観に関する認識を社会アイデンティティの変化の点から分析することを目的とした。

また共生観についてはポストコロニアルにおける共生という点に絞った共生観の分析および社会教育的対話活動を通じた変容の把握を、もう一つの目的とした。

3. 研究の方法

研究テーマとなる共生観について、主に文献調査の方法で、概念の起原から経緯を整理した。東洋の共生観に注目した上で、さらに平和学の文脈における構造的暴力概念を加えて考察したところ、差別的な共存形態を肯定するような共生概念においては、消極的平和は存在するものの積極的平和を望むことが極めて難しいという点が明白になったため、植民地主義的なものを肯定する共生概念と肯定しない共生概念とに区分する必要があると考えられた。こうした過程を経て本研究では、グローバル化におけるポストコロニアル的共生を中心課題とすることにした。

次に研究代表者によってすでに日本国内および北米、欧米で試行されてきた社会シミュレーションを、研究対象地域に合致するように二地域の紛争問題として修正を加えながら、イスラエルおよびパレスチナ地域の学生やNPOに関わる社会人を対象に社会シミュレーションを用いたワークショップを企画実施した。

この実施に併せて、先の共生観に焦点を当てた質問紙調査、インタビュー調査を行った。この調査には集団間葛藤に関するアイデンティティを調べるためPAC分析(Personal Attitude Construct Analysis)法および絵画分析(interpretation of the kinetic school drawing: KSD)法を随時併用することによって、ポストコロニアルな共生観に関する社会意識をより深く捉えようと試みた。

この手順の中で研究全体の性質については以下の変更があった;研究計画当初には地域内環境を反映させたシミュレーション/ゲーミングの単発的な試行と効果測定を研究対象都市、シミュレーション内部での破壊的コミュニケーション手段と対話的コミュニケーション手段の選択の数量的変化を計測することと、ディブリーフィングにおける質的变化を調査することで、共生観を調査することを研究範囲としていた。共生観の精緻な分析の結果、限定された場面でのシミュレーション経験とそこでの効果測定という実験室的な研究では、紛争地におけるポストコロニアル的な共生というテーマに対して極めて不十分かつゲーム参加

者のばらつきに影響を大きく受ける研究アプローチとなる恐れが判明したため、「コミュニティ全体の共生課題において、シミュレーションが果たす対話機能」というローカル・コミュニティにおける社会教育的なアクションリサーチとしてシミュレーション・ゲーミングを捉えるという枠組みへ移行した上で、現地調査を行うこととなった。

4. 研究成果

社会シミュレーションの開発・修正；地位格差のある集団間葛藤問題は、環境問題、土地・資源問題に加えて、植民地主義に特徴的な問題が加わるため、ゲームの改良点として植民地主義的な要素を盛り込む必要があった。また株式投資などの現地経済とかけ離れた部分などゲーム実施時に理解が難しい部分については、修正が求められた。学習形態としてワークショップ形式に不慣れな集団を対象の場合であっても、討論などの相互作用を経験していればシミュレーション・ゲーミングを進行する上で支障がないと分かった。また、ローカル・コミュニティの社会教育や対話という点からシミュレーション・ゲーミングを捉え直すことで持続可能な開発のための教育(ESD; Education for Sustainable Development)の一つのツールとしての可能性を試すという側面が加わった。

植民地主義的およびポストコロニアル共生観の区分；共生観に関しては、構造的暴力の概念を適用し、物理的な共存（分離/隔離共存を含む）にとどまらず、実質的な平等や自由、人権などの積極的平和概念を追究した相互関係を通じた共存を、より厳密な意味での共生と位置づけ、日本国内におけるマイノリティ問題（琉球、アイヌ、朝鮮などの民族問題、女性・障がい者問題、さらに福島や沖縄などNIMBY立地問題に見られる国内植民地と言われる諸問題）を通して植民地主義的な共生の問題点と、ポストコロニアル的な共生について、文献調査およびインタビュー調査により整理した。こうした「共生観」の分析により、パレスチナ地域の将来的共生観に関する質的調査を、単なる物理的生存に留まらず、ポストコロニアルな「対話と和解」という観点に焦点を当てて行うという視点が加わった。

社会心理的变化に与える学習手法としてワークショップの評価分析；集団間葛藤状態の是正とくに偏見の是正に関する教育（社会教育を含む）では、教条主義的手法がそぐわずRPGなど体験を含むワークショップ形式がより有効だと考えられてきた。本研究では、ワークショップや芸術的活動を通じた学びの手法が、社会心理的变化に果たす役割について理論的背景をもとに検

討分析し、とくにシミュレーション・ゲーミングを通じた「学びほぐし/アンラーン（unlearn）」の過程が、個人の内的態度構造の再編成に関わる変化をもたらす可能性について評価分析した。

理論的成果；集団間葛藤問題の是正に関して、長期間有効と考えられていた接触仮説に伴うアイデンティティ変化の効果について、同化的共生に寄与する場合は偏見が保持残存することから、必ずしも単純接触が偏見是正を担保しないという点が改めて社会心理学分野で指摘された。この指摘は従来の接触仮説を揺るがすものではあるが、本研究でポストコロニアル問題における共生課題を精査する中、とりわけ朝鮮半島と日本の共生課題を調査する過程で確認した点と合致している。接触仮説の有効性に限界が認められたということは、今後は仮説検証型研究ではなく、集団間葛藤の是正過程そのものを問い直すような新たな仮説創出型の研究が求められるという大きな潮流の変化を意味する。

課題；シミュレーション・ゲーミングの実施や、インタビュー調査等を通して、集団間葛藤状態にある成員がそれぞれ想定している共生観そのものには共通点が多く、決してかけ離れたものではないことが分析された。共生観の醸成のためには対話を通じた他者理解も欠かせないため、今後はこうした成果のうちとくに絵画や芸術等の直感的に訴える素材を通すなどして、互いの共生観の類似点や現在の共生課題に関して自由で開かれた議論を行うことが必要と考えられ、その実施を更なるアクションリサーチ的課題と捉えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

松本陽子、対話と共生のための社会シミュレーション・ゲーミング - イスラエル・パレスチナ地域における実施の意義と目的、日本シミュレーション&ゲーミング学会全国大会論文報告集、査読無、2012年度秋号、2012、7-8

松本陽子、PAC分析法を使った平和概念の内部構成分析 - 社会アイデンティティを保持した関係構築への意欲、アカデミア社会科学、3、査読無、2012、171-178

松本陽子、葛藤場面对話に導く能力とは何か - 対話的自己主張（アサーティブネス）概念と異文化コミュニケーション能力の分析、トランセンド研究、査読有、

9(1)、2011、24-45

(2)研究分担者

なし

〔学会発表〕(計4件)

松本陽子、共生における社会アイデンティティ - ジェニン自由劇場『アルナの子どもたち』(映画)を元に、第3回複雑系科学シンポジウム、日本科学者会議複雑系科学研究会、2013/09/24、大阪大学

松本陽子、対話と共生のための社会シミュレーション・ゲーミング イスラエル・パレスチナ地域における実施の意義と目的、日本シミュレーション&ゲーミング学会全国大会、2012/10/20、青山学院大学

松本陽子、異文化理解におけるシミュレーションを通じた学び、日本シミュレーション&ゲーミング学会全国大会、2012/06/03、流通経済大学

松本陽子、社会心理学から見た集団間紛争の緩和過程と非暴力抵抗運動の広がり - 人は何に呼応しネットワーク化するか -、平和学における複雑系科学の可能性第一回ワークショップ、日本科学者会議、複雑系科学研究会、2012/05/03、大阪大学

〔図書〕(計件)

〔産業財産権〕

出願状況(計件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

松本陽子(佐々木陽子)
(MATSUMOTO(SASAKI), Yoko)
南山大学・総合政策学部・講師
研究者番号：40274732